よみがえった瓦たち－松江歴史館を護(まも)る鬼－

松江歴史館が建っている場所は、松江城の東虎口（出入り口）に隣接していることから、江戸時代には一貫して重臣の屋敷地として利用されてきました。建設前に行われた発掘調査では多数の瓦が出土しており、格式のある武家屋敷であったことが分かります。

平成 21 年に開館した松江歴史館ですが、この屋根を飾る瓦は発掘調査で見つかった瓦を参考に復元したものです。今回のスポット展示では、復元するにあたり実際に参考とした瓦を展示し、その理由や特徴を紹介します。普段あまり気にすることのない屋根瓦ですが、展示品と屋根の上の瓦を見比べてみてはいかがでしょうか。

鬼瓦～恐い顔の守り神～

建物の大棟(おおむね)や降(くだ)り棟(むね)の端を飾る瓦は鬼瓦と呼ばれています。鬼瓦の起源は古代朝鮮の新羅(しらぎ)にあるとされ、人々は「鬼は神であり、神は高いところに降る」と信じていました。そこで、鬼神の像をつくり、屋根に飾ったのがはじまりです。日本で本格的に鬼面の鬼瓦が使われるようになったのは室町時代からですが、江戸時代からは隣を睨むとして敬遠され、悪疫退散や招福といった願いを込めた「般若面」「恵比寿」「宝珠」など、多様な文様の鬼瓦が作られました。そのため、天守の近隣に住む家臣が「鬼」を飾ることはなかったと言われていますが、この松江歴史館の地下からは鬼面の鬼瓦も出土しています。重臣の屋敷ということで、特別に許されていたのかもしれませんね。

松江歴史館の屋根を飾る鬼瓦は、大棟の鬼、降り棟の鬼、隅棟(すみむね)の鬼の 3 種類あります。今回の展示では、そのうち鬼面の 2 種類を展示しています。

降り棟の鬼

松江歴史館の建設前に行った発掘調査の際に、屋敷跡から出土しました。ほぼ完形に近い状態で、鬼の表情が見てとれます。

松江城下町遺跡（殿町 287 番地）・（殿町 279 番地外）南屋敷出土　鬼瓦　松江市蔵

復元にあたって、出土品は耳や角が破損しており、本来の形が分からないため何度も修正を繰り返して復元品が完成しました。実物よりも愛嬌のある顔に仕上がったと感じています。

大棟の鬼

この鬼瓦は出土品ではなく、当屋敷地で飾られていたという伝世品をもとに復元したものです。

鬼瓦　松江市蔵

こちらも降り棟の鬼と同様に、眉間部分の角や牙が消失しています。そのため、剥がれ落ちた痕跡や類似の瓦などを参考にして製作し、最終的に強面の鬼が再現できました。他の鬼瓦よりも高い位置に飾られており、荘厳で迫力のある雰囲気となっています。

実は珍しい？「雲州松江の左桟（ひだりざん）」

当初の屋根瓦は、別々に作られた丸瓦と平瓦を交互に配置していましたが（本瓦葺き）、重量があることから、城郭や寺院など一部の建物に限られたものでした。17 世紀後半になると、丸瓦と平瓦が一体化した「桟瓦」が出現します。これにより瓦は軽量化し、広く普及が進みましたが、松江の城下町に導入されたのは 18 世紀半ばとみられています。桟瓦の中でも、屋根の上から下を見たときに、山なりに曲がった部分（桟）が右にあるものを「右桟瓦」と呼びます。全国的にはこの右桟瓦が広まりましたが、実は、松江の城下町から出土する江戸時代の桟瓦は、桟が左にある「左桟瓦」がほとんどなのです。しかしながら、なぜこの地域で左桟瓦が採用されたのかはよく分かっていません。

松江歴史館の屋根にも左桟瓦が使用されています。現在は右桟が主流となっているため、鋳型から作成していただいたこだわりの復元瓦です。

松江の街を散策すると、今なお左桟の瓦が残っている建物に出会えます。

軒先を飾る「橘文」

軒平瓦も、発掘調査で出土した瓦の文様を参考に復元しました。

「橘文」は密柑の一種である橘に例えた名で、柿の実にも似た形の文様を中心に据えており、左右には唐草文や子葉文が配置されます。おおよそ 18～19 世紀の製品とされています。この軒平瓦は桟の部分が残っており、左桟であることが分かります。

松江城下町遺跡（殿町 287 番地）・（殿町 279 番地外）　北屋敷出土
軒平瓦　松江市蔵

他にも色々な場所から鬼瓦をみることができます。

お問い合わせ先
松江市歴史まちづくり部　まちづくり文化財課　埋蔵文化財調査室
〒690-8540　松江市末次町 86 番地
TEL：0852-55-5284　　FAX：0852-55-5571